

けいざい+地域発

養蚕復活 バイオで紡ぐ

「斜陽産業」と言われて久しい養蚕への参入が相次いでいる。糸だけでなく、医療用品、化粧品などの原料にも使われている。新たなバイオ産業として息を吹き返すことができるか。

熊本県山鹿市に4月、国内最大の養蚕工場「あつまる山鹿シルク」ができた。

床面積4100平方メートル、総工費約23億円。年間で繭を最大100ト生産できるという。達成すれば、養蚕農家が約130戸ある群馬県(2015年47ト)を、一つの施設で超える。社長の島田俊郎(74)は「農業だけではなく、科学、医療でも幅広い役割を果たせる」と力をこめる。

繭の生産はピーク時の1930年代の約40万トが、135ト(15年)まで減った。化学繊維が普及し、中

医療品・化粧品…参入相次ぐ

国の安い生糸が入ってきた。養蚕を守るために70年代には生糸の輸入規制が始まったが、かえって関連産業が海外に移ることになった。いまや製糸工場といった関連産業は群馬、香川、長野各県などにそれぞれ数軒だけ。生産した糸は和服などに使われている。

島田は、求人情報誌をだ



あつまる山鹿シルクの工場。4月、熊本県山鹿市

す「あつまるホールディングス」(熊本市)の社長が

本業だ。14年初め、ある講演会で無菌ルームや人工飼料で蚕の飼育が可能と知った。「これは行ける」。ラ

イバルはいないし、空いた土地でできる手ごろな新規事業、と感じた。

無菌ルームでは、病気に弱い蚕を安定的に育て、高品質な繭を生産できる。従来のやり方では生産は年

3、4回ほど。新たに作った工場では最大24回できる。昔に比べれば国産の糸も価格が下がり、輸入糸との価格差も小さい。伊藤忠

商事の子会社に売り先を探してもらっている。高級衣料向けの生産を目指す。

最近の研究では、蚕は遺伝子組み換えや特殊なウイルスの力を借りて、人間に近い成分のたんぱく質を

作ることが可能と判明した。将来的には大学と連携し、工場の一部を、手術で使う縫合糸や、すり減った軟骨の再生といった医療用の研究に使うアイデアもある。

ただ、繭の生産が軌道にのるには3年ぐらいかかりそう。この間、赤字が続くことになるが、本業の利益などで穴埋めする覚悟だ。

また、新工場は作ったものの、蚕を成長段階ごとに移し替えたり、繭を採って仕分けたりする作業などは人手に頼るしかない。

新潟県十日町市の和服加工販売「きものブレイン」も15年末、無菌飼育の養蚕施設の試験操業を開始。粉にした繭を混ぜ込んだ化粧品やせっけんなどを18年までに商品化し、百貨店への出店を目指す。原料となるのは品種改良で生み出された、「葉緑素」(クロロフィル)を含む緑の繭だ。

社長の岡元松男(68)は14年、群馬県的大型製糸工場

(大畑滋生)